

せたかむい

古平町役場総務課
842・2181(袋)
平成20年11月1日

年表で読む 古平の歴史

[133]

明治以前のこと

先史時代

1. 先住民族の遺跡

◇町内の遺跡

古平に人が住みつくようになったのは、先住民族（アイヌ民族以後）の住居や使用した道具類、石器、土器、骨製品、後に金属類などの発見によって、縄文時代（北海道では今から八千年前から縄文文化が始まったと言われるが、詳しいことについては問題が多い）と考えられている。

町内にも遺跡は各所にあるが、その後の土木工事や、石器や土器など持ち去られたりしたのも多く、充分な発掘調査が行われていないのが現状である。

◇歌棄遺跡

明和二年（一七六五）、歌棄村に大漁を祈願して稲荷神社を創建したが、その工事をしていて発見されたと考えられる。明治四三年（一九一〇）になって、稲荷神社は郷社琴平神社に合祀された。

その後の昭和三二年、国道建設による歌棄トンネル工事の一部道路になったが、浜町山本忠吉所有の農地で、地下約一メートルのと

ころから土器の破片が発見されている。歌棄と沢江を分ける丘の畑からは、石器や土器の破片などが容易に見つかり、興味を持って子供たちが畑仕事の合い間によく拾っていた。

◇新地町方面

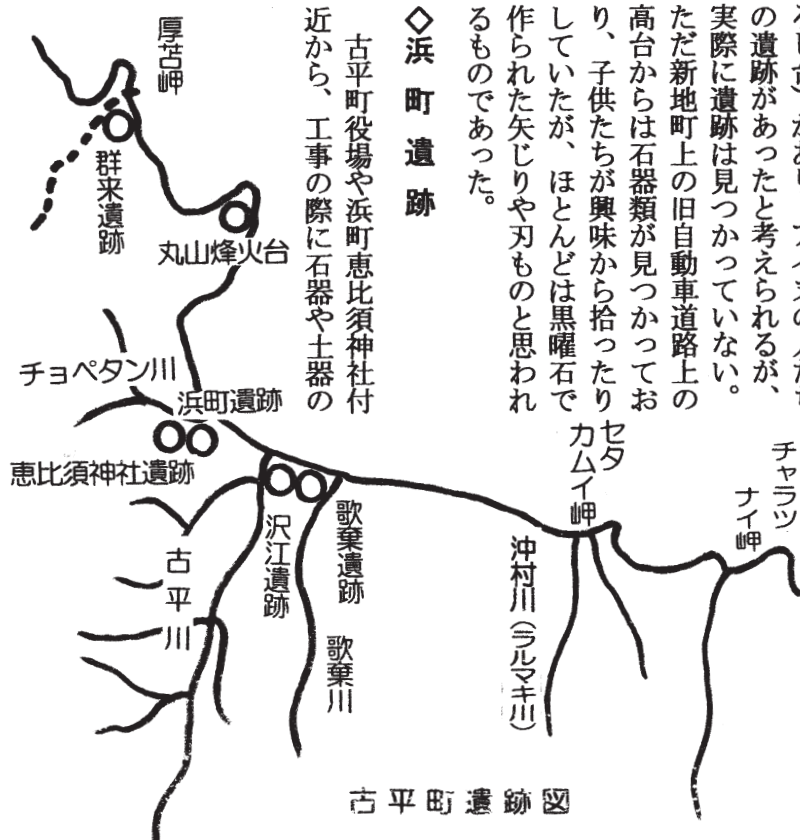
新地町方面は丸山に烽火台（のろし台）があり、アイヌの人たちの遺跡があったと考えられるが、実際に遺跡は見つかっていない。ただ新地町上の旧自動車道路上の高台からは石器類が見つかったり、子供たちが興味から拾ったりしていたが、ほとんどは黒曜石で作られた矢じりや刃ものと思われるものであった。

◇浜町遺跡

古平町役場や浜町恵比須神社付近から、工事の際に石器や土器の

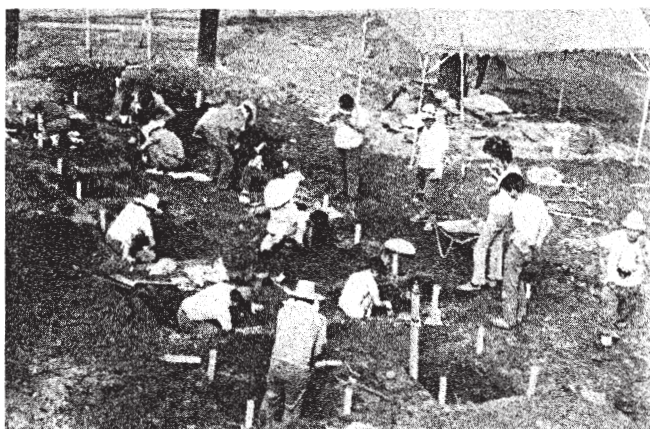
破片が発見されていて、昭和四六年、小樽博物館竹田学芸員等によって発掘調査が行われた。

この場所は、道内の大学教授や学生等によって、それ以前に予備的な調査が行われたことがあったが、その時の結果として、この場所は土木工事によって土が移動していたり、遺跡として破壊されて



古平町遺跡図

←古平恵比須神社遺跡発掘状況

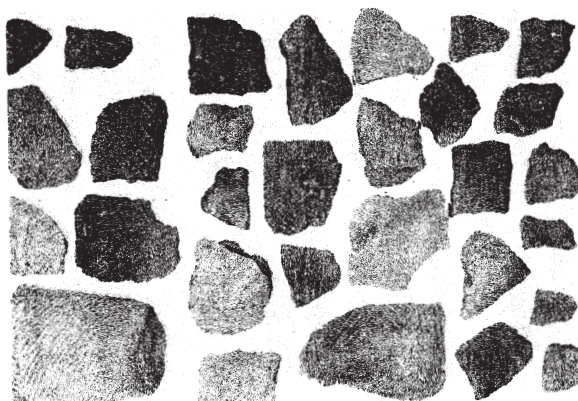


いるようなので、学術的には価値が低いと認められる。ということであったが、改めて調査が行われたということである。

◇古平恵比須神社遺跡

昭和四十六年六月（一九七二）、神社の鳥居が老朽化し、その立替工事の際確認されたものである。新しい鳥居の柱を埋設するため一メートルほど地面を掘り下げたと

←恵比須神社遺跡の出土土器



ころ、厚さ約五〇センチの腐葉土の中から縄文土器の破片を発見し、これを採取保管した。

遺跡の調査をしていた竹田学芸員が、偶然、その保管していた資料を見て所見をまとめたのである。

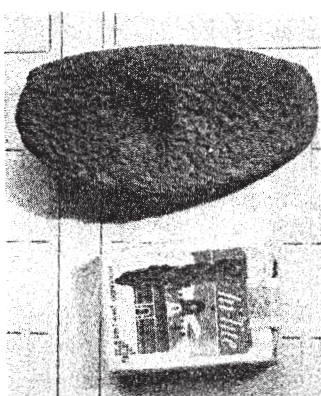
この資料は、縄文文化中期末から後期初頭に当るもので、小規模の範囲から多量の資料を採取できたということは珍しいことである。また、北海道の先史文化の流れの中で、その空白を埋めるための資料として格好のものである。従っ

て正式の発掘調査を行って、正しい編年表を作成する必要があるとの見解をもった。

この発掘調査には、古平町長伊藤由松、神社の氏子総代斉藤林蔵、神社管理人武川種吉、教育委員会などが協力した。

発掘調査団は大学関係者、小樽市内の高校、中学校の教員、それに大学生、高校生等の総勢二〇名であり、沖公民館を宿舍とし、同年八月九日から一八日までの一〇日間実施することになった。

←伊藤町長発見の火起し石器



●遺跡の文化的內容

遺跡のほとんどは縄文文化中期末から後期初頭に及ぶ短い時期のものである。しかし、この分布と年代、正式な形式名設定などにはなお検討を要することから、正式

な報告までには時間と論議が必要であろうとされた。

●遺物の処理と保管

古平恵比須神社遺跡の出土資料は、現在小樽市博物館が保管している。その整理には現状から、なお多くの月日を要するであろう。しかし、近い将来には正式な報告書を発刊する義務を負っている。さらに社会教育的な立場からの公開展示、学術利用、埋蔵文化財の保護と普及も同時に実施していきたい。以上が報告書の概要である。

◇群来遺跡

昭和三八年、群来町の海岸道路、厚舌トンネル新設の際も、縄文土器、骨器などが発見されたが、ブルドーザーで土石類を海岸へ押し出した後であり、残っていたのは一部であった。

◇沢江遺跡

沢江恵比須神社前付近は、早くから石器、土器の破片が発見されていた。道路工事や住宅新築などの際に発見されたものは散逸し、保存されているものはごく少ない。

昭和三年ゝ続く

▼二月一七日(吹雪)

起床八時、一日宛に柱コヨミもはがれてあと二三、四枚になった。暮らしてみれば一年も早いものだ。本年の特筆すべきことは春の鯨の大不漁、六月、悦三の病氣、一月の菊花展と御大典などだ。鯨漁の不結果は掛方の未収と漁具の売れ行きも悪く、従つてわれわれ商売も不成績だ、こんな年は早くいつてもらつてよい年を迎えよう。

昨日からの暴風雪今日もなかなか止まぬ。海は大時化だ。こけでも子供らは元気だ。悦三、風邪がなおつてよかった。店はカレ網漁中でポツポツ忙しい。本年スケソ漁は思わしくないところへ、二、三日の時化で、一隻で縄百枚以上も流したところがあるとして、船元は元気がない、稼ぎ人だけはよいようだ。午後から吹雪も静かになった。梅野君、一〇月に旅行以来各地を回り、今佐渡に居るとてハガキが来る。夜の長いこと、九時頃から一時まで手習いを熱心にやる。気の進まぬときや暇のないと

きは出来ないから、今の内にやるべしだ。

▼二月一八日(雪)

起床八時、今日も雪が降り海は時化だ。スケソ漁は毎日の時化で出られず、それに漁も思わしくないとのことだ。夜に入り吹雪甚だしく、寒さもきびしい。子供らが休んでから賀状を書く、後手習い

られる。昼頃になつても吹雪はますます甚だしい。欠員中の古平町長も決定し、近々中に発表されるらしい。

▼二月二十日(吹雪)

起床九時、風邪氣味で寝たり起きたりしている。寒さがきびしく四、五日来の吹雪、少し収まつたようだが寒さが甚だしい。

▼二月二三日(快晴)

で授業が終り、二二日は大掃除と終業式、二三日帰省すること。正治は、幸治がお土産を持つて来るから迎えに行くと言つて、とても楽しみにしている。

起床九時、風邪氣味で朝寝した。今日は冬至だということでカボチャの馳走がある。珍しく静かなよい天気だ。幸治が今日帰省するとい

うので、四郎や正治らは正午に迎えに行くが、遅れたのか船に乗つてなかった。午後に来るだろう。四時頃には吉治、悦三、トミらが皆で迎えに行く。船が遅れたとて五時半ようやく来た。珍しくよいナギでまるで夏の海のような。ナギでちょうどよかった。夜食にとれたてのカレを焼いて食べさせた

らおいしい、おいしいと言つている。海岸に住む者の勝ちだ。子供らはバスケットからいろいろなお土産を出して大喜び大騒ぎだ。子供らと八人、皆壮健で何よりの幸福と感謝せねばならぬ。

▼二月二三日(雪)

起床九時、今日は割合暖かい天

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

をして二一時休む。

▼二月一九日(大吹雪)

起床八時、昨夜来の寒気きびしく、そして大吹雪になった。子供らの学校行きもなかなか大変だ。これでは沖村や泥の木辺から通う生徒はゆるくない。今朝のシバレは今冬一番の寒さで、店にある硯の水も凍る。命日で和尚さんが来

▼二月二二日(雪)

風邪氣味で一〇時に起きた。海は静かになったので、カレ網、スケソ船も出たとのこと。カレ網はよいが、スケソの釣りは思わしくないとのこと。熊さんは屋根の雪下ろしをやる、本年の雪の多いこと、早雪引きやらねばならぬようだ。幸治から手紙が来た、二〇日

気だ。学校が休みで幸治らがいるので、家の中の賑やかなこと。男七人に女一人の八人の子供、それにヤブ長から四人も来ているのでますます賑やかだ。子供も育てる内は骨が折れるが、一年ごとに成長しているのを見れば大きな楽しみである。幸治、文治、吉治の三人は特に丈が高く壮健、何れもこの分で元気で育つてほしいものだ。平さんの都合で今日は米とぎ、明日午後からモチつきをすることになった。学校から文治の通知箋が来る。心配していた代数の成績も上がりこれならいい。雪はずい分降る、年末の帳簿調べをして一二時休む。

▼二月二四日(雪)

起床八時、雪は降っているが割合暖かい天気だ。今日午後二時頃からモチつきをやるので、熊さんは朝からいろいろと支度で忙しい。須藤万太さんが正午頃から来てくれ、金さんと三人で一生懸命だ。四時頃までは三人だけなので、幸治もシャツ一枚になってつく。本年になって初めてだ。私は今日はチョイチョイ店へ客が来て忙しい。

品切れだったウルシアバが届いて二俵も売れた。モチつきは五時頃から伊のさん、三郎さん、古島さん、若松さん、田かあさんらが来て賑やかになった。私も三白ほどつく。子供らは大喜び、最後まで眠らずマユダマつけをして喜んでい。一〇時半終った。学校から幸治の成績表が来て、全部で七科目の内一一科目が甲であった。二期より二人とも成績が上がっていて良かった。

▼二月二五日(晴)

昨日午後からモチつきで、子供らは夜一〇時頃まで喜んで起きていた。こうして家族皆で楽しめるとはモチつきもよいものだ、子供らが喜ぶのが何よりの楽しみ。今暁二時頃から困でモチつきやるとて、熊さんは昨夜来引き続いてやる。私は板戸を開けるので七時半起床す。幸治が昨晩雪かきをし、雪も降らなかつたので雪かきもなくてよい。困のモチつきには、ヤブ長から一行が三味線つきで手伝いに来て、ナカナカ賑やかであった。私も八時頃、正治と四郎を連れて見に行く。今日は快晴で船が

皆出た。子供らが家にいるのでナカナカ賑やかだ。熊さん一〇時頃困から帰る。文治は熊さんと漬物を蔵に入れるなどして手伝っている。夜、一二月の目録書き、のち年賀状を書く。

▼二月二六日(雪)

起床七時半、天気もナギもよく漁船は皆出た。熊さんは年末目録配りに一日中歩く。私は店番をしながらかモチ切りの手伝いなどする。幸治が帰って来ているので、子供たちは喜んで遊んでいる。文治は使いに歩き、今日は用、ヨまでネギなどを持って行く。こうして兄弟大勢が一緒にいるのもあと二三年だ。夜、年賀状締め切りなので、一二〇枚だけ一束にして入れた。店の仕事を終り、支店の主人から頼まれた手紙四通を書く。朝はいい天気だった八時頃からまた大吹雪になり、雪が四、五寸も積もる。熊さんが戸外に出て雪をかきが、間口が広いからなかなかゆるくない。

▼二月二七日(雪)

起床八時、いよいよ年末になつ

た。マユ玉の木や松葉などを持って通る人も忙しそうだ。雪は休みなく降る、年内でこんなに沢山降つたのも珍しいことだ。幸治は熊さんと保木からアバ四個運ぶ、古平の店は全部品切れなので漁師連は皆待っている。こんなとき一万間もあれば大威張りで売れるのに惜しいことをした。熊さん午後から集金に出かける。不景気なのでなかなか集まらぬ。夜は干モチ切りをやる。妻と熊さんはカマボコ焼きをやり一二時頃までかかる。

▼二月二八日(晴)

起床八時、いよいよ歳末になった。母の命日、和尚さんが来られる。想起すれば、母の亡くなられたのは九年前、慈愛深く自分らは海より深き恩を蒙った母だ。永久に忘れられぬ。今日は天気快晴、漁船も皆出た。午後妻は平の子供が不快だというので見舞いに行く。病人にはどこでも困るものだ。熊さん今日は沖村、新地方面へ集金に出かけた。学校は今日から休み。トミは乙が二つ、あとは全部甲、悦三は全部甲、吉治はまだ持つて来ていない。今のところ四人とも

上成績だ。

▼二月二九日(雪)

起床八時、本年の雪の多いこと、屋根の雪下ろしやら雪引きをやっているところがある。上天気で小樽から勇丸、共栄丸が来た。文治はあちこちへ歳暮配りに歩く。私は熊さんと浜まで荷物を取りに行く。店はカレ網品切れなので閑散。カレ網はどれも品切れだという。学校が休みになり男七人、女一人で賑やかなことだ。夜、熊さんと妻らは年取りのかまぼこ焼きやらヨウカンこしらえに忙しい。

▼二月三〇日(雪)

起床八時、いよいよ年末になった。昭和三年もあと一日となった。この年は予想もしない鍊場の大不漁で、町は何れも大不況、われわれの商売も掛け未収、商品は売り上げ不振という悪い年であった。こんな年は早く行つてよい四年を迎えよう。熊さんは集金に出かけた。私は店番、そして神仏にお供えなど飾る。アチコチから歳暮の魚をいただく。

▼二月三二日(晴)

昭和三年もいよいよ今日を以て終わりとなるのだ。道行く人も何となく忙しくあわただしい。熊さんは集金に出かける。珍しく天気快晴、そしてこの暖気だ。晴れていて暖かいのは珍しい。妻は迎年の支度でナカナカ忙しい。私は帳簿の整理などで忙しい、沢江の藤田さんが入営するとかで、入営を祝う旗一本頼まれた。書初めを書くつもりで引き受けた。夜五時から吉例の茶の間で、子供らに座布団を敷き、お膳で馳走を並べる。何れもニコニコ顔で嬉しそうだ。久は妻がおんぶしているがニコニコしている。子供八人は何れも壮健で、こうして目出度い年を迎えることは何ものにも替えがたい喜びだ。

昭和四年

▼一月一日(大吹雪)

四時半に目が覚めた。早速洗面、神仏を拝してお寺の祝聖会に行く。町はまだ真つ暗で起きている家も少ない。西の宮神社を参拝して、

のち和尚の部屋で例年通り新年を寿ぐ。新入会員西島君とも一二名の内、㊦さんが旅行で不在、一名が揃った。茶菓に酒肴、雑煮もいただく。六時四〇分辞し郷社へお参りする。この頃から大吹雪に加えて大時化になった。下駄ばきでは歩くのがなかなかゆるくない。帰り、㊦に寄り八時半帰宅する。近頃珍しいよえな大吹雪、しかし割と暖かい。南ヤマセ風で海は大時化だ。一〇時からの学校の拝賀式に参列、一一時から役場の交礼会に行き、正午帰る。吹雪はますますはげしく町の往来も止まるほどだ。子供八人、ほか四名、一家揃って壮健で新年を迎えられ、ことは、何より幸福と感謝せねばならぬ。

▼一月二日(大吹雪)

起床七時半、昨日来の大吹雪今日も止まず、いっそうはげしく海は大時化だ。二日の初売り日だが、この大荒れでは往来も出来ないの、人通りも稀だ。町に立てた売り出しの旗や看板もみな吹き飛ばされてる。来たお客から聞けば、スケソ釣り発動機船三隻に共栄丸

が、停泊中大吹雪大波で海岸に打ち寄せられ破損せりとのこと。新年早々とんだ災難で、損害である。店は大吹雪のため客も来ない。それに鍊場不漁のため網も売れず、カレ網も品切れのため不況だ。夜に入りて吹雪、時化はますます甚だしく、家の中にも雪が吹き込んでくる。これでは漁師も心配なことだろう。家でストーブにこうしてあたっている自分らは幸せと思わねばならぬ。

▼一月三日(雪)

起床七時半、一昨日来の大吹雪もようやくやんでいた。新春早々の大時化で発動機船五隻が難破したという、気の毒なことである。

㊦丸山老母の葬式なので送りに行く。吹雪は止んだが海はまだ相当地に時化している。昨日は吹雪で出られなかった客がポツポツ来る。家では子供らが氣勢でなかなか賑やかなことだ。ウマコを貰ったと言つて喜んでゐる。正治までも、それをがま口に入れてはたさないでゐる。自分らもウマコを貰った、書初めを書いたりして楽しい時代もあったが、この頃が楽しい。

夜、トミ、吉治、悦三は新地へ活動写真を見に行く。

▼一月四日(雪)

起床八時、寒さはきびしい。正月中で店も閑散だ。幸治、文治らも弟らとさわいでいる。家に居れば遠慮なく騒ぐことも出来るのでやはり楽しいのだ。困の勇さんが入営するので、送る時の旗書きなどやる。外に保木、風間さんの分も頼まれて書く。夜、困に勇さんの送別会に招待されて行く。酒肴を沢山よばれ一一時帰る。

▼一月五日(雪)

起床八時、本年は雪がずい分多い年だ。店は閑散、困常さん入営祝いの送る旗の書き役を頼まれる。幸治、吉治、トミも旗に寄せ書きをする。国の図案もいろいろ考えられて月桂樹に金鶏鳥を書き、中に赤で祝の字を書いている。私は次々と一〇本余りも名前を書くのでなかなか忙しかった。夜、ナツ子の家で、子供らに馳走するからと言うので、四時頃に一行が行く。幸治と私は、旗にまだ書くことがあり六時に行く。ソバにもち、そ

のほか馳走をよばれ八時帰る。子供らは遅くまでさわぎ喜んで帰る。帰ってから妻は小樽へ送るカマボコ焼き、私はまた旗が一枚来たので書く。

▼一月六日(晴後吹雪)

起床七時、まだ電気がついていいる。この頃では早起き。雪はずい分降り、熊さんは八時過ぎまで雪かきをやっている、店の前は広いのでなかなかゆるくない。困の勇さん、入営で今朝出発するので、幸治、文治、悦三、トミらも旗を持って見送りに行く。旗も一四本あり、勇ましく賑やかである。九時に出発し船に乗り込む。晴れたよい天気であったが、二時頃から吹雪になり、時化模様となった。明日は幸治らが帰るのだが、船がなければ陸行しなければならぬ。どうかナギになつてもらいたいものだ。夜、傘さんが来たので鍋焼きの馳走をする。

▼一月七日(大吹雪)

起床七時、今日は幸治、文治らが小樽へ帰る日なので、早くから起きて皆支度しているが、昨夜か

らの吹雪がはげしく、雪も沢山降り船も出ない。陸行すべく傘さんも来てくれたが、近來にない大吹雪になり、郵便配達人も沖村までも行かれず途中から戻る始末で、海陸共に交通途絶、止む無く小樽行きは中止した。役場からと回漕店から証明を貰う。幸治、文治共に一日も休まぬので欠席にならぬようにと、事情をしたため学校まで欠席届を出した。実際不可抗力なのだから、学校も承知してくれるだろう。このために今日一日はガヤガヤして送る。夜に入っても雪はますます降り、寒さも強い。明日の天候は如何。明日は入営兵も出発するのだから万難を排しても行くだらう。

▼一月八日(雪)

就寝前から、今日の天候は如何と氣遣つていたが静かになったので、今日は船があるだろうと思つていたところ、七時頃浜から船があるからと電話があつた。先ずはよかった。早速支度に忙しい。八時半、私も浜まで行く。入営兵も本陣の浜から乗船するので、浜は百余本の祝いの旗と見送り人で黒

山のような人出だ。学生連も何十人も行く。一般の客もあり、百人からの客だ。雪も降り波もあるので、ハシケもなかなか大変だ。一〇時出帆した。これで安心した。寒さもなかなかきびしい。スケソ船は出たが戻つて来た。夜、困支店の湯に行く。聞けば⑤信ちゃん、年内より不快のところ重態にて、家族や⑥の人らも小樽へ行っているとのこと。夜、⑦へ見舞状を出す。

▼一月九日(晴)

起床八時、毎日毎日の雪であつたが今朝だけは雪が降らず、熊さんも朝の仕事が楽であつた。上ナギ、上天氣で漁船は皆出た。大雪だったので、今日はあちこちで雪引きをやっている。マツ子が正月休みで家に帰つたので、妻は勝手の仕事で忙しい。幸治と文治が居らぬので、家の中もひっそりとしている。午前中役場へ行き、造田補助の申請書の書き方を聞く。営業税届書、例年は二月末調べに来るのに、今年は来ないので今日書面を出した。〇の老母が不快のため札幌へ行つていたが、去る二

日死亡したとの通知が今日来た。古平で逝かれたのであれば知人も沢山おつたろうに、知らない土地で亡くなったとは不幸なことだ。

今日の上ナギでスケソ大漁、五千から九千ぐらい取れたとのことだ。

▼一月一〇日 (雪)

起床七時、マツ子が正月休みで帰っているので、朝の支度に忙しい。今日も朝から雪が降り積もった。どこの家も雪が多く、雪のやり場に困っている。雪は豊年と言うから、今春は大漁ならん。幸治から手紙が来る、一昨日午後三時頃無事小樽着。八日始業式に出席せざるも不可抗力ゆえ欠席にならなかったとのこと、よかった。夜、マツ子が帰ってきた。

▼一月二一日 (雪)

今日は仏さんの命日で、一一時頃和尚さんが来られる。今日は帳祝い日、商店のお祝いだ。新しい帳簿を準備し、夜は馳走が出る。今日は風が強く雪投げも出来ない。

▼一月二二日 (吹雪)

起床七時半、この頃は七時にな

ると薄明るくなる。大雪で中庭は雪でいっぱい。屋根の雪も沢山で家の中は薄暗い。建具も開けたてが自由に出来ないようになった。

二、三日前から雪引きをやるつもりが、毎日の荒れた天気で雪引きも出来ない。どこでも雪が沢山で困っている。熊さんと吉治が通帳配りをやる。待っていたカレ網五千間が本日着いた。本日中午に二千間出た。吹雪は今日も甚だしく漁船も休む。

▼一月二三日 (快晴)

起床七時、この頃電気は七時二〇分頃まで点いている。久し振りの好天気で雪引きによい。

平、天野さんが来て、熊さんと三人で雪引きやる。珍しい天気快晴で軒から雨だれがたれ、練場頃の模様であった。父は「久志」の守と店番が来て□□(二字不明)死亡したとのこと、ビックリした。悪いとは聞いていたが、まさか死ぬようなことはないと思っていたのに、人生夢の如しだ。早速お悔やみに行く、近所の人たちも来て、忌中

通帖や通知状など書き一一時帰る。八木さんの兄貴も小樽病院へ入院中だが危篤とのこと。田清水でも兄貴と、一七歳の娘さんが不快で

休んでいるとのこと。スケソ延縄をしているが船も故障があり、いろいろ心配なことばかりだという。いつどんなことになるやら、一日を無事に過ごせばその日は幸いと感謝せねばならぬ。

▼一月二四日 (晴)

起床七時、熊さんは平、天野さんらと雪引きだ。中のアツカン亡くなられたので妻は手伝いに行く。手伝い人が私の家に来てダンゴなどこしらえている。スケソ網ボツボツ売れていく。本年の雪の多いこと実に驚き入った。今年の大雪にはどこでも雪で困っている。夜中の通夜に行く。香典帳の手伝いをしたり、お参りの人が帰ってから、石井さんと忌中礼のはがきを書く。午後八時頃から雨が降る。午前十一時頃までいろいろ話す。明朝は祝聖会なので寝坊してはと、一時過ぎ帰り休む。今日は寒九、寒九に雨が降れば豊作ということわざもある、縁起が良い。なにと

ぞ本年は万事吉兆であることを祈る。

▼一月二五日 (雨風)

今日は祝聖会例会、昨夜は中の通夜で一時に帰り休んだので、もし寝過こしてはと目覚まし時計を五時半にして休んだので、ちょうどよく目を覚まして出かけた。昨夜来の雨は今朝も降っている。大雪もこの雨で少しは減るだろう。今日は風も交えて時化模様になってきた。お寺に着したのは六人目、六時半から読経、七時半に終り、例の通り和尚の部屋で話して八時半帰る。海は時化になった。平、天野さんは雪下ろし、熊さんは中葬式手伝いだ。十一時出棺、妻が送りに行く。あのピチピチした元気な人が逝かれたという、実に人生一寸先はわからぬものだ。四時頃骨拾いに行き、帰って忌中引きによばれる。七時に帰って㊦へ佛参に行き、帰ってから後、中へ行き香典帖調べの手伝いをし一〇時帰る。雨は晴れたが時化になり、そして吹雪になる。㊧齊藤の進一さん一九歳、昨夜一〇時頃遂に小樽病院で逝かれたとのこと。気

の毒なこと、どんなにか悲しんで居られることやら。

▼一月一六日 (大吹雪)

起床八時、昨日は寒中に珍しく雨であつたが、今日は朝から大吹雪になり、海陸共に交通が止まる。サの亡くなった進一さんが今日小樽から来る予定のところ、この大時化で来られぬ。都合の悪いときは悪いもの、気の毒なことだ。熊さんは虫の後片付けの手伝いに行く。妻は骨納めに行く。小林老婆正月休みに遊びにきて来て、コタツにあたりながら子供らに昔話を聞かせたり、歌を歌ったりして楽しそうにしていたという。ノンキに、こうしているのは長生きするものだ。私もこのようなのんびりした、楽天的な生き方を見習いたいものだ。

▼一月一七日 (雪)

昨日来の吹雪も今日は少し静かになった。悦三は、一五日頃からハラが痛いと言って昨日の始業式を休んだが、今日は何ともないと言いつて学校へ行く。悦三はどうも弱いほうだが、四郎はどこ

も悪いということもなく丈夫なほうで腕白大将だ。この頃はスキーに乗るとて、買つてくれとせがむ。来年買つてやるとなだめてもなかなかきかない。正治は本好き。今日午後三時の船で㊤の進一さんの遺骨が来るので妻も迎えに行く。何とも言えぬ気の毒なこと。夜、支店のふるへ行き、帰つて㊤の通夜に行き、十時頃までいろいろ話をし帰る。

▼一月一八日 (雪)

起床七時半、小林老婆は午前帰られた。熊さんは向かいの電気会社で雪引きを始めたので手伝いしている。今日は観音講で妻は寺参りに行く。風間貞一さん過日入営したが、身体検査の結果不合格となり本日帰つて来た。夜㊤の通夜に行く。十時から祝聖会員三、四名でお経をあげ十一時帰る。

▼一月一九日 (吹雪)

今日は仏さんの命日だが、㊤へ妻が手伝いに行くので休んでもらう。そのかわり私がお経をあげる。今日は寒さがきびしい。虫では七日の命日だというので私がお

参りに行く。その後十のかあさん、丹毒でよくないと聞いたので見舞いに行く。どこでもとんだことばかりで困つたものだ。夜、㊤の通夜に行く。八時頃から雪が激しく大雪になる。十一時に私らで修証義をあげ十一時半帰る。寒い寒い夜だ。

▼一月二〇日 (雪)

昨夜はサの通夜で遅くなり、今朝は九時頃まで休む。昨日来寒気がきびしく、店のコタツに入つていても頭や耳が冷たい。田の母さん、今朝、浅野の船で小樽へ行った。丹毒は恐ろしいものだから注意せねばならぬ。田梅野でも庁商へ行つてゐる次男がカッケ症とかで、主人が行つたとのこと。どこでも病人が出ると困る。わが家は大勢の上、割と病氣もなく、先ずは感謝せねばならぬ。妻は今日も㊤へ手伝いに行く。私は午後一時からの葬式を送るに行く。午後五時からの忌中引きによばれる。寒さのきびしいことヒドイ。七時帰る。

▼一月二二日 (雪)

かぜ気味で九時起床。あまり寒いので寒暖計を見たら店で二十六度F (マイナス三・四度C) 今年中で一番の寒さだ。雪の降る。毎日毎日で積もる一方だ。家でも出面を頼んで屋根の雪下ろしをやる。この寒さのなか、高松宮殿下には去る十八日札幌にお出でになり、付近で山岳スキーをなさつたり、山小屋にお泊りなさつたとか、元気なお方である。

▼一月二三日 (雪)

去る二十日、大寒に入つてからは寒さが随分ときびしくなつた。今日などは店のコタツにはいつても鼻や耳が冷たい。雪は毎日毎日降り積もり、中庭も店のほうもやり場がないほどだ。どこの家も穴ごもりの状態だ。中庭の雪がいつぱいで家の中も暗くなつた。熊さんは朝から晩まで雪投げた。休会中の帝国議会は今日から開会する。



(続)

小さい秋

大 澤 文 子

紅葉の頼りも遠近から聞こえはじめ、本格的な秋のシーズンとなった。丘の上に堤の下に、小さい秋を見え出すたびに喜びを感じる。『芸術の秋』を謳歌する人びとの声も高い。

そんな時、ふと走馬灯のようにわが身をかけぐる諸々のこと。

そうそう、確か昭和四十年の二月頃だったと思う。若い主婦達が数人わが家押しかけて来られ、「ぜひ女性コーラス団をつくってほしい」と言う。

「えっ！」一瞬間食らったが、元来音楽好き私は二つ返事で承諾、ただちに準備にとりかかった。

まず指揮をしてくださる先生をと、小学校の久保田先生をお願いした。快く賛成してくださったのでうれしかった。練習の会場は、小学校の音楽室を土曜日の午後お借りしたいと思ひ、その当時の水野校長先生

をお願いし、承諾をいただきうれしかった。

トントン拍子に話しはすすみ、私はたびたび札幌の玉光堂へ出かけては、女性達の歌えるような歌曲を選挙、常に何曲か選んで来てはコピーして会員に渡し、私もピアノに向う日々が多くなつた。

いよいよ昭和四十年二月二十七日、『なぎさコーラス』として町の中にうぶ声をあげ、新鮮な話題をふりまいたのである。「白いブラウスに黒色のスカート」という、清楚な姿が好意をもたれたのであろう。

二月に発足したばかりなのに「全後志大会」や「古平小学校開校九十周年記念式典」にも出演等々、うれしい悲鳴を町中にあげたこともある。

また、その頃、突然、札幌の放送局から「婦人団体のコーラスとは珍しい。ぜひ録音させてほしい」との

連絡があり、再び驚き一瞬とまどいを感じたが、久保田先生に相談して受けることにした。

昭和四十年頃の漁村地帯には、まだ女性コーラス団などはなかったであろうか。また、その頃、漁村地帯ではテレビは少なかったようだし…。

十一月十三、十四日の両日、ママさんコーラスの時間に放送したいという。

いよいよ十月十日、札幌から放送局の人たちが泊りがけでやって来られた。二日分を収録させてほしいという。車二台にものものしい道具を積み込み、係りの方たちも四五名、女性アナウンサーのやさしい笑顔も見えた。

一同緊張したが、久保田先生の笑顔にホッとすする。やがて収録が始まり、女性アナウンサーの「指揮久保田功先生、伴奏大澤…」のなめらかな声をうつつに聞き、会員一同タクトの流れを追い、すばらしい歌唱力を聞かせてくれた。
「ハーモニーが美しい…」と、録音班がほめてくれた。

翌年にはまた、「第十三回道民合唱祭小樽後志大会」が小樽市民会館で開催されるので、ぜひ出席を

してほしい…という。不安な気持ちもあったが出席することになった。いつの日だったか、小樽合唱連盟理事長の上元芳男先生に、一度だけ、古平小学校講堂で「指導をいただいたことがあったが、まあいいでしょう」のご批評を受けたことを思い、小樽・後志地区大会に出席することを決心した。

いよいよ当日、昭和四十一年十一月二十七日となった。指揮は足立勇先生をお願いした。二十団体、九百名出席の大音楽会である。車の中では「なぎさコーラス」会員、緊張のあまりか口数も少ない。いよいよ小樽市民会館へ到着。

出演は五番目だという。休む間もなく司会者の爽やかな声が…。「指揮足立勇先生、ピアノ伴奏大澤…、曲目は『アフトンノ流れ』もみじみずみのほとり』の三曲です。どうぞ…」

拍手、拍手の中を存分に歌い終えたコーラス員一同、涙しながら舞台を降りて行くのだった。

最後に上元先生の指揮のもと、九百人の大合唱、「小さい秋」を歌い終えたことを今でも忘れはしない。ああ…。

亡母の追懐

葛 西 庸 三

母は昭和五十七年十一月一日の正午頃、札幌の曾孫と遊んだ帰り、揚げ芋を食べたいと言って中山峠で車から降りると、その場でアッと大きな声を出して倒れ、息を引きとった。八十九歳であつた。医者者の診断は「急性心不全」であつた。

いつも「求心」を持ち歩き常用していたが、日常は比較的元気で頭の働きもよく、「老人クラブ」の旅行動などには嘻嘻として参加していた。だから唐突の死の知らせには驚いた。

ちょうどその頃、母と一緒に生活していた長兄の建設会社が倒産した後だったので、親戚の者達が世間を憚り、葬儀は極く簡素にやるべきだと主張した。その結果、お通夜は亡くなったその日の夜遅く、急遽行われた。葬儀委員長の挨拶もない、誠に寂しいものになった。

幸い私の職場や関係者の配慮で、遠くから多勢の人がお通夜と告別式に参列してくれた。更に幾つかの花輪も飾られ、何とか葬儀の形となった。当時、旭川教育大の学生だった私の長女は、葬儀に参列しようと旭川を出た途端、信号を無視した対向車に衝突され、その事故処理のため来れなかった。

告別式の時、「おばあちゃん、お別れに行けなくてごめんなさい。いつもお小遣いを戴いて有難うございました。優しかったおばあちゃんのこと、いつまでも忘れません。どうぞ安らかに眠りください」という娘の電文が読まれた時、娘の気持ちを思つて私の眼からとめどなく涙がしたたつた。

床に伏すこともなくあの世へ行った母なのだから、天寿を全うしたと言つていいとは思ふのだが、それでも私は、せめてもう二、三年は生きていて欲しかったと胸の中

で熱く思うのであつた。

さて、母の思い出は色々あるのだが、その中で今でも脳裏に鮮明に甦る光景がある。

私が六歳の秋、二人の妹と一緒に母の古里へ行った時のことだ。

母は佐渡の新穂村の出身であつた。久しぶりの里帰りだつたと思う。

往復の汽車のことや、青函連絡船のことなどは全く記憶にないのだが、鮮明に蘇ってくるのは新潟から乗った船のことだ。

その日は大荒れの海だつた。小さい船だつたと思うが、私達の座席は船底の畳の部屋であつた。

荒れ狂う波のしぶきが船の小窓を激しく叩く。船はぐらぐら揺れる。

乗客は荷物と一緒に、船が傾く方に転がって行く。柱にしがみつく人もいる。嘔吐する人が続出した。

母は転がりそうになる幼い私達三人をしっかりと抱きしめた。その母の両腕は、太い手綱となつて私達の体を縛つた。私は息苦しさ

に耐えながら、母の腕からはかな温もりを感じて心が満ちていた。

母の実家は「ローソク屋」であ

つた。大きな家で、磨かれた床板の広い店の中に、ローソクなどの品物が置かれていた。

私たち三人は同じ年頃の従姉妹と、毎日店の中を走り回って遊んだ。

家の周りに柿の木が何本も植えられ、熟した柿の実がたわわに付いていた。私は毎日木に登つて柿の実をとり、腹一杯食べては毎晩ね小便をして母に叱られた。

母が亡くなつて二十六年経つた。昨年から思い立つて「家系図」を作ることにした。

石狩市役所に調べてもらい、母の戸籍を請求した。間もなく佐渡市役所から送られて来た「送付書」の中の「備考欄」に「別紙は明治四十四年三月二十一日以降、スエさん(母)が十八歳頃からの戸籍になります。それ以前の戸籍につきましては、保存期間経過の為、廃案となっております。」と書かれていた。

母への思いを込めて着手した「家系図」への私の思いは、途切れそうに残念でならない。

町内の学校探訪

[14]

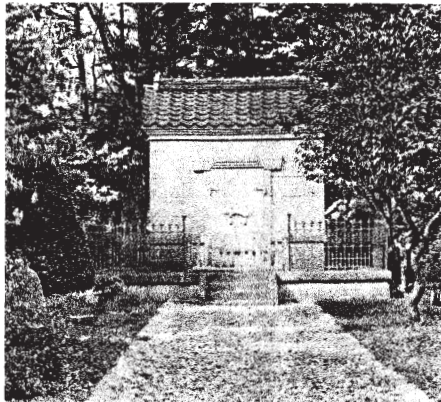
古平小学校

◇御真影参拝の通達

大正年間、教育関係の法令や規則、条例などの改正や廃止がひんばんに行われた。特に御真影(※)については『御真影参拝例規』同九年には『御真影奉掲順序』が通達された。この頃から御真影奉置所の前を通る時は、奉置所に向って最敬礼をするように定められ、儀式の時御真影を式場に移す時には、児童や参列者は最敬礼をして迎え、式場から送り出す時も同様であった。

※「御真影奉置所」＝天皇・皇后両陛下のお写真(御真影)と教育勅語謄本とを、校内の一定の場所に奉

置するよう訓令が出された。これによって各学校ではそのための建物を建設したが、これらは奉置所・奉安所・奉安殿などと呼ばれていた。



→ 奉安殿(素十句碑の後つ通り)

◇阿波萬訓導死去

大正八年一月一三日、古平小学校主席訓導阿波萬が、腸チブスにかかり死去した。学事視察のため旭川・岩見沢・札幌・小樽・余市と旅行中感染したもののようであった。葬儀は三週間後の雪の舞う日に禅源寺で行われたが、中村重次郎校長の弔辞は全葬者の涙をさそった。

阿波萬訓導は古平町の出身で、職務に極めて熱心であった。児童の成績の向上に努め、児童にも信頼され、よく家庭訪問をし、父母の信望も厚く、前途を嘱望されていた。

大正五年一月から開始した、古平教育会主催の夜学会は阿波萬の主旨によるものであり、同僚の佐藤峻訓導と共に講師となり、青年の知識と意欲の向上に努めた。時が移り昭和三〇年、教えを受けた卒業生が発起人となり、『阿波萬先生之碑』を古平墓地入口近くの地に建立し、三十七回忌の法要を行った。碑石の文字は、曹洞宗

町村ではその財力に応じて、周囲の景観にも配慮しながら建築をした。

◇飛行機見学旅行

大正八年の修学旅行は、余市町で開催された岸博士飛行大会の飛行機見学のために行われた。中村重次郎校長ほか教員七人に引率された、尋常科六年の児童一六八人が、七月一五日の船便で出発し、見学の後、その日の船便で帰校した。

当時、飛行機は最新式の乗り物であり、大正一四年七月には、国防、航空思想普及のため札幌を飛び立ったアプローズ式飛行機が古平町に飛来し、古平町競馬場(現在の古平中学校グラウンド周辺)に着陸して観客に公開する予定であったが、立ち木に翼を接触して、着陸に失敗するという事故があった。この時会場では、飛行機を観覧するのに料金を徴収したという。思わぬ事故に遭ったが幸い人身事故には至らなかった。

飛行機を修理している期間に、札幌から来町した関係者が小学校児童に飛行機についての講話をし、飛行機の折れたプロペラを小学校

本山永平寺副管長、札幌中央寺住職福井天章の揮毫である。

に寄贈した。その木製のプロペラはその後、運動場の壁に展示されていたが現在には不明である。

やがて修理を終え小樽市に向けて飛び立ったが、またまた小樽の赤岩付近で故障のため不時着するという再度の事故に見舞われたがこの時も二名の搭乗員は無事であった。

◇美国小児童とのあつれき

当時は交通の不便なこともあり、児童たちのほとんどは古平町内から出ることは少なく、他町村の子供たちと交わる機会も限られていたことから、縄張り意識のようなものが強かった。

たまに行き来する美国小学校の児童とは仲が悪く、相手を見つけて「ベコ」とばかりにすると、一方は「ブタ」と言い返していた。この当時、教科書は美国小学校の児童の分も古平の販売店で購入していたので、美国の児童たちは集団で買いに来ていて、その都度言い争いやけんかが起きていた。

大正八年五月のある時、集団でとうとう大げんかになり、警察官が出動するという騒ぎにまで発展

してしまつたことがあつた。その時の様子を積丹町史年表資料に次のように記されている。

「五月第一回の日曜日に、美国小学校児童（五年以上の男子）一〇〇余名と、古平小学校児童三〇〇余名が、古平第一番目の掘割（新地町と群来村との境界）を起点として大けんかを始め、小集団を單位にした攻防戦を各所に展開し、石合戦や組み打ち、なぐり合いまで行つたことから、古平警察署長の出動によつて、美国小学校児童は逃げ散じた。」

翌月曜日の学校朝会に、けんかに参加したものは、屋体に取り残され、桂田徳太郎校長から懇々と説得された。」

（このことについては古平町の資料はないが、後日、話を聞いたという人の語つたところでは、実に多少の誤認があつたようである。積丹町史編さんに当つた高橋武雄記録として、確認はしていないが次のような文書がある。）

その事件があつた後の大正一〇年一〇月、美国小学校の五年以上の児童が、大森山などの山道コースを通過して古平浜町まで遠足を行

つた際、美国小学校と古平小学校の児童代表五、六人が話し合つて、今後はお互いにけんかなどしないことを約束し、これからは運動競技などの試合をして親睦を図ることにした。

◇児童保護者会設立

大正一〇年二月、各部落会長、副会長が発起人となり、古平尋常高等小学校児童保護会設立に努力し、一日の学芸演習会に発会式を行うことになり、会長に高野常吉を選任した。会の目的と事業は、会則に次のように定めた。

第二章 目的及び事業

第四条 本会は古平尋常高等小学校に於ける教育の方針を解しその事業を後援するを以て目的とす
第五条 前条の目的を達せんがために行ふ事業大凡左の如し
一、児童教育上学校と家庭との連絡を図ること
二、児童修学上の保護奨励に努むること

三、学校に於ける各種の教育的施設に対し奨励を与えること
四、就学の普及、出席の奨励に努むること

五、その他本会の目的を達するに必要と認むる事項

会費は一カ年金六十円とし、二期に納めることにした。当時の部落は一六あり、各部落に会長と副会長を置いて役員とした。

この年、摂政宮殿下（後の昭和天皇）のご来道を記念して、学校に校門を建設することにし、同窓会、一般から寄付を募集して八月に完成した。

◇公開教授研究会

大正一四年九月、公開教授第一回研究大会が古平尋常高等小学校で開催された。澤田石造訓導の理科、松尾スエ、宮本憲訓導の算術などを一般にも公開し、研究発表も行なつた。他町村からも参加があつて好評を得たことから、研究会は毎年行われた。

◇古平教育会の設立

明治二十二年、願雄寺住職の石上皆広が次のような趣旨書を起草した。（原文は難解な語句が多いので多少書き換えました）

古平教育会設立の趣旨
ソモソモ教育ノ社会ニ必要ナノ

ハ、兵力が戦ニ欠カセナイノト同ジコトデアル。ダカラ教育ハ社会ノ進歩ト同ジデナケレバナラナイノハ当然デ、教育ヲオロソカニシテハナラナイ。ワガ国ノ教育ノ程度ハ日ニ月ニ改良進歩ノ途ニツイテイルガ、海ヲ隔テタ我ガ北海道ノ状況ヲ見ルトキ、社会ノ大勢ニ遅レタトイウ感ハ否メナイ。殊ニ古平地方ハマダ教育ノ何タルカラ覚ラズニ、徒ニ旧習ヲ守ツテイル傾向ガ強ク誠ニ遺憾ナコトデアル。

今ココニ有志諸君ノ賛成ヲ受ケ、応分ノ釀金ヲ頂キ、幻灯機ヲ購入シ、協同一致シテ社会ニ役立ち、大イニ将来ニ益スルトコロガアロウト思ワレル。本会ヲ設立シテ、併セテ有志諸君ノ釀金ヲ望ムモノデアル。

明治二十一年三月

通俗古平教育会仮規則

第一章 名称

第一条 本会ハ通俗古平教育会ト称ス

第二章 目的

第二条 本会ハ有志者ノ結合融和シテ教育ノ改良上進ヲ図ルを以テ目的トス (以下 省略)

この案が賛成を得て、明治二六年、古平教育衛生会という組織になつて発足したが、明治四一年、

会は解散し、古平教育会として創立された。会員募集のために各町内会を廻つて幻灯会が行われ、會長に岩淵三樹蔵町長が就任し、町から百円の補助金が支出された。

翌明治四二年一〇月、会が主催して教育品展覽会が開催されたが、この展覽会には他府県から一七七点、道内から一五一点、町内からも一五八点の出品があつた。

子カラ人体ノ解剖、ソノ他形アルモノヲ大ニシタリ小ニシタリ、ソノ他珍奇ナモノカラ地理、歴史、動植物ノ類ニイタルマデコノ幻灯機ニヨツテ説明スルコトガ出来ルノデ、児童デアツテモ知ラズ知ラズソノモノニ対スル興味ヤ知識ヲ起サセ、物事ヲ容易ニ理解スルコトガ出来ヨウ。百聞ハ一見ニ如カズトモ言ワ。

教育会の行事はその後、講話会などの開催が主な事業になり、大正四年、東京仏教講話会講師東条風鈴の「教育勸語、戊申詔書」の講話会が主催され、小樽新聞社主宰の天野雄彦の講演会などの後援をしている。

翌大正六年一〇月には、農産品

物品評会と併せて教育展覽会を開催し、教育品は町内各学校の児童の作品を主として展示した。

◇夜学会

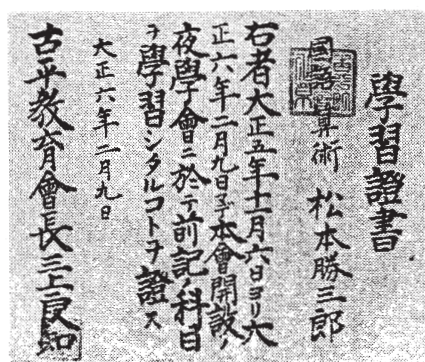
大正五年、古平尋常高等小学校阿波萬訓導らの主唱により、同年十一月から翌年の六月まで夜学会が開催された。

夜学会は阿波萬、佐藤峻訓導らが講師となり、学科は算術と国語で、修了生には毎年学習証書を授与した。夜学会はその後も順調に継続され、大正一一年の受講生は八五人になり、大正一五年、古平青年訓練所が開設されるまで続けられた。

◇教員講習会の開講

大正九年四月、北海道庁が主催、古平教育会が後援する尋常小学校

← 夜学会学習証書



準教員講習会が開催された。この講習会は前年の大正八年に開講が予定されていたが、講師の都合がつかず見合わせられていたものが、男子三〇余人、女子二〇余人が受講した。講師は道から塚越南之助が派遣され、中村重次郎校長、奈良真樹、民三吉、石田正高訓導らが講師に委嘱された。講習の後、検定試験が行われ、合格者には小学校教員免許状が交付された。合格者の内四人は古平町内の各小学校に着任した。

古平教育会では、この講習会の受講者の宿舍の斡旋や運営などに協力をした。 (続く)

— 国道開通に続いて —

〳 積丹半島横断道路〵 2

神恵内道路の建設

✦ 積丹国道開通

古平～余市間の鉄道建設は、大正年代より町を挙げての悲願であったが、後に整備された自動車道路の建設が命題となった。そのような中で、海岸道路の建設案が浮上してきた。

そして、終戦の混乱期を経て、国道229号線(積丹国道と命名)は昭和三年の夏から着工され、沖を通る定期船からは、百㍎を超える絶壁の下ではうように働く人たちの姿が見られ、大きな期待と共にその難工事であることは誰の目にも焼きついていて、当時は「夢の国道」とも言われていた。

しかし、一〇余年の歳月と延べ七万人を動員し、総事業費約

一〇億円を要して、昭和三年秋に完成した。古平・余市間約二七キロメートルの区間は、半分の約一四キロメートルに短縮されると共に、通年の利用が可能となり、一挙に長年悲哀を感じていた陸の孤島は解消した。

その後、引き続いて丸山トンネルと群来町の海岸道路が建設され、厚舌トンネルから美国町へ続く海岸道路の建設や改良工事が行われた。

最大の難関であった余市山道の改良・新設工事により、古平町から積丹町余別までの交通路は開けたが、海岸線沿いに隣接している神恵内村との交通は、依然として断崖によって途切れていた。

また、山脈によって往来や物流

が途絶している古平町と神恵内村の間にも、道路の建設が急がれる状況もあり、古平町を通過して積丹町に至る重要な道路として建設が進められることになった。

✦ 六志内への道

海岸沿いの集落だと、山々が遮り断崖や絶壁などで交通が遮断されていて、海路によってそれなりに交通が開けているが、地勢の険しい陸上となるとまた容易ではなかった。

古くから、古平と積丹半島の山脈を越えて、神恵内や泊との間には、けもの道とも言える人の往来できる道はあった。

現在の泊村とは、稲倉石周辺から山を越えて泊村の旧泊炭鉱※1の辺りへ、神恵内村とは古平町の六志内から川沿いに、清川地区へ出るという通路があった。

六志内(ロクシナイ)は早くから知られていた地名で、アイヌ語のルオクシユナイ路を流れる川という説明があるが、これだけではちよつと意味がはつきりしない。一方、神恵内村でも奥地に点在する集落があり、その頃から六志

内付近を通って古平との往来があったようであるが、日常的にこの道を利用する人もなく、特に改修されることもないままに、やがて戦後をむかえた。

昭和三年、樺太からの引揚者三七戸がトーマル(当丸)開拓地に入植したが、神恵内村から営農資材を運搬するにも道がなく、トーマル川沿いに徒歩によってようやく運搬するという、言語に絶する不便な状態であった。

当時は、戦時中から食糧難が続いていた折でもあり、海外からの引揚者もあり、家や生計の道を求めて開拓地に入植する人も多く、今後の開発のためにもここに道路の改修と新設が計画されることになった。

✦ トーマル殖民地線完成

この計画に基づいて同二四年着工し、幅員二・六～三・六メートルの道路を神恵内側から施工した。同二八年に、トーマル開拓団地を通り、トーマル峠までの一〇・七キロメートルが開拓道路として完成し、トーマル殖民地線と呼ばれた。

積丹半島の基部にも当る余市・岩内間の道路の開削は、余市町史によると弘化四年（一八四六）に行われたとあり、古平・岩内間の道路踏査が行われたのは昭和八年で、旧美国町が直接神恵内村への道路踏査を試みたのは、積丹町史資料によれば昭和十一年（一九三六）のことである。これらの調査から何れも着工には至らなかったが、以前から横断道路建設への願望は強かった。

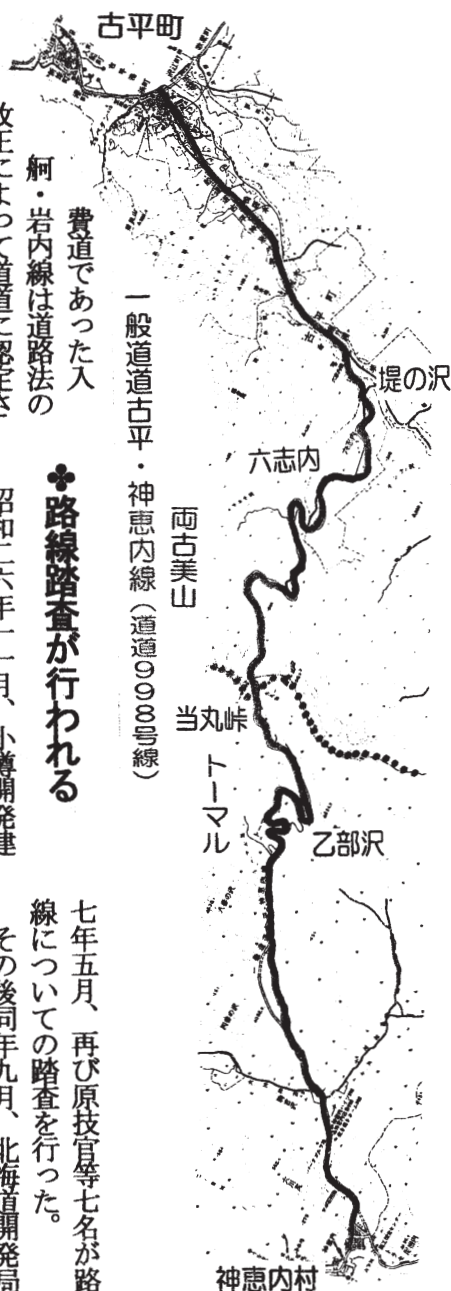
◆六志内道路の改修

明治四〇年（一九〇七）、六志内に青森からの団体入植者があり、当時は稲倉石鉾山までは馬車が通行できる道路はあったが、登り口から入植地までは踏み分け程度の道でしかなかった。

戦後の昭和二年、主として樺太からの引揚者が、すでに離農してしまつた後の六志内開拓地に入植した。

町では、登り口から約四キロメートルにわたつて部分的な補修工事をしたが、本格的な改修工事は昭和二十八年から始められた。

昭和二十七年、それまでは準地方



◆路線踏査が行われる

昭和二十六年二月、小樽開発建設部原技官ほか三名がトーマル・六志内間の測量を行ったが、翌二



↑崖を切り崩して道路の建設

七年五月、再び原技官等七名が路線についての踏査を行った。

その後同年九月、北海道開発局長池田一男が海岸道路などの視察に来町した折、この区間の改良工事について陳情をした。開発局では、トーマル・六志内間八キロメートルの改良工事の延長により、さらに道路の効用が増大する路線となり、工事費もそれほど高額ではないので予算の確保も難しくなく、予定される路線として認め設計に取りかかった。

— 続く —

おしよる

編集の都度『短歌』欄の《私の一首》金子寿子さん・玉谷美都子さんの原稿は次号に掲載介いたします。ご了承ください。

先月、道新を見ていてドキリとしました。「抱卵スケソウ大当たり」エッ！古平でもスケソウ漁再来？と思ったのは早トチリで、なんと釣り人の釣果でした。浜では漁師が漁の不況を嘆いているのに、素人のほうが大漁に沸いているこの頃です。

むかし：大正時代のこと。ニシン漁がそろそろ終る頃ニシンに混じって網に乗るスケソウはほとんど利用する人もなく、捨てるのに困る？ 魚粕にしても商売にならない厄介者でした。

ところが大正の末期から古平でも俄然スケソウに期待が寄せられるようになりました。それまで不漁知らずで、古平の発展を支えてきたニシン漁の衰退です。それまでは、時季になったら必ず大挙して押し寄せるものと確信していたニシンに、突如として異変が起きたのです。

そんな時、ニシン漁に次い

抱卵スケソウ大当たり

(道新のタイトルから)
こんな大物が→



で古平に大きな恩恵を与えたのが、それまでじやまもの扱いのスケソウ漁でした。

漁場は、古平では丸山沖西北へ四から九マイル(六・四〜一四・四キロ)ほどの地点でした。漁期は冬なので風波が荒く、一隻の漁船に七、八人が乗り組んでいましたが、何よりも防波堤のある漁港が要望されました。

スケソウは乾燥してメンタイ(明太魚)として朝鮮に輸出しましたが、その後、現在の中国にも輸出されるようになりました。卵は紅葉子として本州各地に移出しましたが、古平産は品質が良いという事で、東京方面で名声を得ていました。

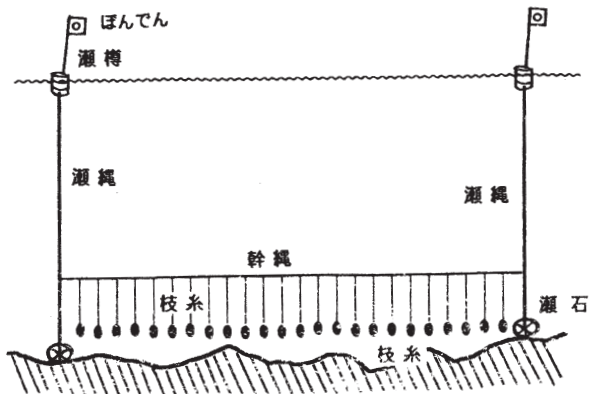
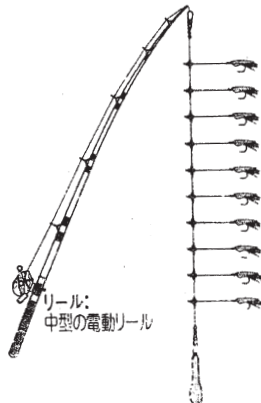
スケソウ漁は、すべて延縄による釣りでしたが、大正末に浜町の吉井市松が、流し網を

← 大漁で賑わう本陣の浜



驚かされます。いつの日か、古平の漁港にもスケソウの山が築かれるような漁のあることを願っています。

← 釣りの仕掛け まるで釣竿に延縄を仕掛けたようなもの



→ スケソウ延縄の模式図

刺網に改良して、やや大形の川崎船にフォードの発動機をつけ、試験的に使用したり、熱心な漁業者の工夫や研究によって盛んになり、古平のスケソウ漁業は、むかしのニシン漁に代って古平を代表する漁業に一大発展を上げたのです。

時代は移り、スケソウ漁も衰退して漁船も少なくなり、時たま漁があると町の話題になります。

そんな時、遊漁船で漁師顔負けの漁をする人もいたりして、釣り上げた見事なスケソウの魚体には



雜詠 〔十月号〕
主宰 水見壽男

古平俳句会

石狩の河口とせめぎあふ卯浪
越野清治

菩提寺の墓碑の年輪苔の花

なほ伸びる余力は節に今年竹

森の闇なほ拡げゐし青葉木菟

筒鳥の声に樹海の深さあり

鈴蘭を押花にして北便り
山口悦子

積丹の崖に飛燕や波荒ぶ

気に入りの夏帯軽くクラス会

雨蛙雨を恋しと夜もすがら

万緑が包む球児の声高し
越野敏雄

老鷺の零るる声の耳かすか

年重ねなほ美しく郭公鳴く

青嵐原野の草木小波立つ

〔句評〕

にはたづみ主なき家に花菖蒲
高橋重子

うす曇り淡き花台踏むまじく

切り窓の大正ロマン蔦茂る

深深と青葉に染まる雨しづく

石垣を覆ひつくして蔦青し
外山俊久

運動会緑の風と子等駆ける

山の湯や風と緑に癒される

日一日草食む牛や丈夏野

大潮や夜産みにゆく磯の蟹
堀典子

一本の青葉青葉のふれて鳴る

星の黄と見てゐる水面河骨花

日の注ぐ千余の谷の緑かな

一枚の葉より万緑はじまりぬ
渡辺嘉之

郭公の鳴き移りゆく森幾つ

砂浜の砂ひと粒の暑さかな

両岸を染める青葉の徒ならず
室谷弘子

青嵐潮の遠音を聴く夜かな

岬鼻に潮の筋目や大南風

薫風や昼夜を問はず船の音

〔句評〕

怒涛

【三九】

—一〇月号—

古平俳句会

遠山をくつきりと見せ星月夜 越野清治

漁火の遠く近くに星月夜

砂足で番屋に走り大夏炉 山口悦子

星月夜昭和 新山うす煙

初秋の風に寿ぐ夫婦岩 越野敏雄

五階窓秋の燕を眺めをり

生きのびしこの後の人生木下闇 大和田絵伊

降りさうで降らぬ夏雨待てる日々

細石左右に揺らぎ秋の海 高橋重子

漁火の霧におほわれ茜色

たまらずに海に飛び込む残暑かな 外山俊久

木々の枝大きく裂けて初嵐

吾が内に義父と父住み西瓜食ぶ 堀典子

山並みの遠き向かうの稲光

寄る年の波にも勝てぬ盆の月 渡辺嘉之

故郷は母港の如き盆の月

かなかなや岬の蒼さを深めをり 室谷弘子

かなかなに耳を預けて夢一夜

月影を落して有りぬ海原へ 仲谷比呂古

伝説のシリバ岬や夏炉燃ゆ



雜詠 〔十一月号〕
主宰 水見壽男

古平俳句会

海原に峙つてゐる海霧襖

越野清治

滝音の響きを遠く海は風ぐ

堀典子

漁火のまたたき止まず夜の秋

沖合の匂ひ飛び来る端居かな

夕焼の果てたる岬の樹海かな

空蟬に残りし氣迫葉にすがる

吾が影を溪蓀に映し去りがたし

船音のひびく前浜雲の峰

夏草や蝦夷地のロマン神威岬

山口悦子

一献のまた一献の涼み台

夏草や八十路の母の童歌

渡辺嘉之

夏暖簾片手でそつと母招く

漁火の夕焼雲の去りてより

夏のれん女主人の手染かな

船音の海夕焼の只中に

日本海背にして燃ゆる夏祭

越野敏雄

浜風とすれ違ひたる青田風

街挙げて運河ゆさぶる夏祭

室谷弘子

風はたと止んで岬に夏の霧

漁火に祭囃を届けたく

炎天に重き船脚戻り来る

風そよぐ夏の終りの声を聴く

炎天に息を潜めし山河かな

遊船の湾を行き交ふ風強し

遊船の潮風に酔ひ波に酔ひ

高橋重子

外山俊久

怒涛

十一月号

古平俳句会

笛の音に燃ゆる闇空秋祭 越野清治

火渡りの燃やす闇空秋祭

虫鳴くや昨日も今日も窓の下 山口悦子

鉦叩き鉦を叩いてのど自慢

芋畑山麓一氣に動き出す 越野敏雄

畑の道秋草引きて積む農婦

子の忌日よく蝸の鳴くことよ 大和田絵伊

対岸の際立つ景も秋立ちぬ

セタカムイ動かざる雲ありて秋 高橋重子

沖合に一筆書きの秋の雲

散歩道木洩れ日の散る草の花 外山俊久

校庭の子供の声や草の花

咲きながら地を擦る萩の乱れかな 堀典子

月のぼり金色の帯揺らぐ海

海荒るる風は野分の名残かな 渡辺嘉之

騒立ちし野分の風を映す湖

天帝をかくる風音虫の秋 室谷弘子

夕暮れの湾を制して虫時雨

墓洗ふ父と会話の始まりぬ 仲谷比呂古

目に馴れて星浮き出でし星月夜



十月詠草

九十超えし人崇めきて九十われ若き日までふりかへりをり

池田 テル

菩提寺の夜の御参り境内は月光動き草花見ゆる

坂本 信子

バスに乗り町二つ越え来し友は姑との生活話して帰りぬ

鈴木 時子

この秋は色付き遅く裏庭の紫式部の淡き色合ひ

田中 香苗

久々に学童の声校庭の方より聞こゆ心和みぬ

玉谷 美都子

底抜けに明るき会話笑ひあり月に一度の町内の集ひ

丹後 初江

迷ひ鳩に餌を与えて二週間元気に飛び立ち時々戻る

寺田 カツ子

リンリンとすず虫の鳴く声聞て静かな夜に耳を澄ましぬ

仲谷 喜美能

散策の坂のぼりつつ向つ峰の峯薄紅葉なす木々がめゆく

堀 典子

十一月詠草

古平町岬短歌会

セタカムイローソク岩よ古への浜のにぎはい誰に語らむ

泉 清三

熊野道の自然にだかれ歩みゆく命果てても白衣着て

金子 寿子

楓紅葉山合い深く色づきて流るる川にその色映す

坂本 信子

高台より望むわが町学校を病院を指し声に喜ぶ

鈴木 時子

久々にさ庭の楓朱の色に晩秋のひとつひ命もやして

田中 香苗

秋深くはるか沖あるいか船のあかりぼんやり横一線に

丹後 初江

すずなりの真つ赤なホーズキほろ苦し陰干しにして風の予防に

寺田 カツ子

雨上り雲の切れ間より薄日射し雪虫飛び交ふ秋深み行く

仲谷 喜美能

面影のうすれゆく昭和思ひつつ緑変らぬとど松見上ぐ

堀 典子

俳句

十月投句

霧襖釧路の港動かざる	仲谷比呂古
夜もすがら船音止まぬ島の秋	室谷弘子
新涼の波を見ている舳先かな	渡辺嘉之
海見ゆる梢一葉の秋語る	堀典子
孫の手を引きて嫁来る生身魂	外山俊久
中国の娘等も加わる盆踊り	高橋重子
友よりの積丹岳の初蕨	大和田絵伊
夢叶ふ孫の婚儀や今日の秋	越野敏雄
類に手を添へて黙して秋の人	山口悦子
畑打つ疲れをいやし山の温泉へ	斉藤波留
白雲の影を溪蓀に雫し去り	越野清治

十一月投句

古平俳句会

人通りにはかに多し盆の入り	仲谷比呂古
朝露や高らかに聴く船の音	室谷弘子
芒野の光は波となりにつけり	渡辺嘉之
風紋に色置く帽子秋の浜	堀典子
肩に來た蜻蛉がそつと告げる秋	外山俊久
静かなる青き水面や秋日和	高橋重子
竜胆の色保ちつゝある日和	大和田絵伊
秋蠅の危険迫るも鈍かりき	越野敏雄
コスモスに囲まれ道辺の地藏堂	山口悦子
白雲を頂き羊蹄山今朝の秋	斉藤波留
闇空の炎となりて秋祭り	越野清治

古平町史年表

昭和39年(1964)～続く

同 ：古平小学校校舎が竣工し、沖・明和両小学校が古平小学校に統合される

同 ：古平高等学校定時制家政科夜間部の募集が停止になり、昼間部の家政科として設置が認可される

同 ：古平中学校に特殊学級1学級が認可される。
村本信弥教諭が担任する

5/20：海上保安本部灯台部長ほか、古平漁港の灯台移設について来町する

6/23：廻り淵橋が竣工し、渡橋式が行われる

7/6：島根県から購入した肉牛25頭が到着し飼育農家に配付される

7/ー：古平町体育連盟主催の町内対抗野球大会が行われる

8/14：学校統合により沖小学校が廃校式を行う
(明治13年8月13日 開校)

8/21：同じく明和小学校が廃校式を行う
(明治43年9月25日 古平尋常高等小学校鴨居木教授所として開校)

9/9：古平小学校新築校舎落成式が行われ、児童や教職員、その他関係者多数が参加して町内パレードが行われたほか、3日間にわたって祝賀記念行事が行われる

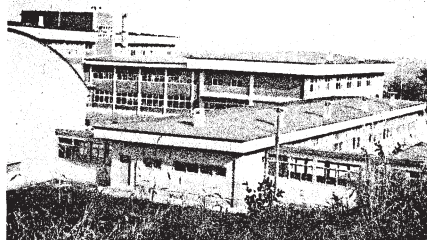
10/10：稲倉石地区で、テレビ共同聴取のためテレビ組合が結成される

11/4：給食センター方式により学校給食が始まる
(道路事情により稲倉石小中学校は次年度)

11/15：古平商工会が第1回珠算検定試験を行う

11/19：札幌市で沖合底曳網漁業禁止区域拡大会が開かれ、古平町からも多数が参加する

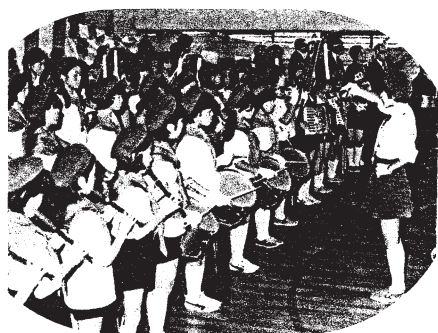
11/23：古平町納税組合全町地域結成記念大会が開かれ、関係者の表彰式も行われる



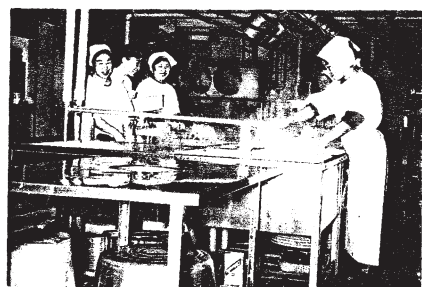
↑ 古平小学校校舎落成



↑ 学校統合についての説明会



↑ マーチの練習風景



↑ 給食センターでの調理

- 11/28：古平町上水道仮通水式が行われる
 12/4：古平漁港灯台が竣工し、修祓式が行われる
 12/12：浜町新生婦人会が中心になり、保育所設置のための設立総会を開く
 12/19：稲倉石鉱山から港町貯鉱所に通じる索道が廃止され、21日から鉱石がトラック輸送に切り替えられる
 12/4：古平漁港灯台が竣工し、修祓式が行われる
 12/12：浜町新生婦人会が中心になり、保育所設置のための設立総会を開く
 12/19：稲倉石鉱山から港町貯鉱所に通じる索道が廃止され、21日から鉱石がトラック輸送に切り替えられる
 — ：古平漁港港町地区に公衆便所が設置される
 — ：北後志地区で熊の被害が多発し、古平町でも放牧中の牛4頭が襲われる

昭和40年（1965）

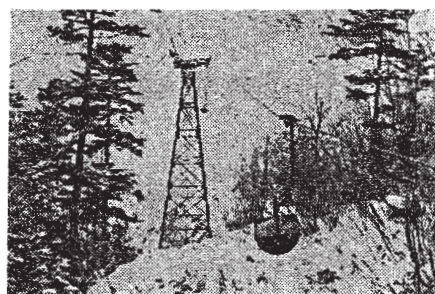
- 1/1：伊藤町長の「わが町を語る」が”道教委だより”に掲載される
 2/15：浜町で幼児2名が川に落ち死亡する
 2/23：稲倉石では局地的な大雨と融雪による洪水で稲倉石川が氾濫し、診療所や社宅など12戸が押し流され、165戸610人が孤立する。自衛隊倶知安駐屯地から救助隊が派遣される
 後にこの時の人命救助で稲倉石自治消防団が余市警察署長から表彰される
 3/20：稲倉石地区で雪崩の復旧作業中再び雪崩があり、7名が埋没し内1名が死亡する（浜町絹千代子）
 4/1：北後志初の私立高校として北星学園余市高等学校が開校する
 4/5：稲倉石小中学校で学校給食が始まる
 6/22：稲倉石に保育園が開設される。21名の園児が入所し、祝賀行事として花火を打ち上げ小中学生の鼓笛隊が先導して地区をパレードする



↑ 古平町上水道管理棟



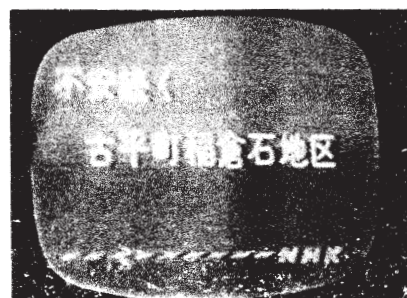
↑ 市街地での水道管設置



↑ 鉱石運搬用の索道



↑ 稲倉石の災害状況



↑ NHKテレビでも放送